第 V 部門

ASR 膨張ひび割れ模擬コンクリートと鉄筋の付着・定着特性に関する研究

京都大学 学生会員〇成清 公平 正会員 山本 貴士 正会員 服部 篤史 フェロー 宮川 豊章

1. 研究目的

鉄筋破断の生じた ASR 劣化構造物において鉄筋の付着・定着機能が十分発揮されない場合、部材の耐荷性 能が低下する可能性がある。そこで本研究では、膨張コンクリートを用いて ASR 膨張ひび割れを模擬した

供試体中の鉄筋に対して引抜き試験を行い、膨張ひび割れが鉄筋の付

着・定着特性に与える影響を明らかにすることを目的とした。

2. 実験概要

供試体の形状・寸法を図1に示す。幅×高さ=200^B×300^Hmmの矩形 断面を有する全長400mmあるいは500mmのカンチレバー型引抜き供 試体とし、引抜き対象の鉄筋は、主筋を想定した供試体(D19)で隅角 部に4本、せん断補強筋を想定した供試体(D10)で断面短辺中央上下 縁に1本ずつ(合計2本)配置した。最小かぶりはいずれも25mmとし た。D19供試体には、横補強筋としてD10スターラップを供試体軸方 向中央に配置(面積比0.18%)した。

膨張ひび割れの有無、横補強筋隅角部破断の有無、付着試験区間長 さを実験要因とした。膨張ひび割れを模擬した供試体の断面を図2に 示す。打設時に発泡スチロールを配置してひび割れのない中空の矩形 断面外郭部を作製した。発泡スチロールを刳り抜いた中空部分に膨張 コンクリートを打設し、鉄筋周辺に膨張ひび割れを模擬した。鉄筋周 辺に膨張ひび割れを誘導するために、矩形発泡スチロールの四隅 (D19)または短辺中央部(D10)に鉄筋方向へのアルミテープスリットを 設けた。また、横補強筋隅角部の破断は、図1に示すように D10 直 線筋を組み合わせて作製することにより模擬した。さらに、D10 供試 体では、引抜き作用を受ける鉄筋が降伏まで機能するのに必要な定着 長を検討するため、付着試験区間長さ 300 および 400mm を設定した。

引抜き載荷装置を図3に示す。引抜き対象の鉄筋をセンターホール 型油圧ジャッキに通し、鉄筋の端部に鋼板2枚を矢羽 根状に溶接して鉄筋に引抜き力を与えた。引抜き荷重、 自由端変位、荷重端変位を測定した。

実験結果および考察

3.1 膨張ひび割れ幅 膨張ひび割れ幅の測定結果を表 1 に示す。ひび割れ幅は、コア部から断面の鉄筋位置 を通過し、供試体表面に現れた軸方向ひび割れに対し

ておよそ 50mm 間隔で約7点測定した平均値である。横補強筋隅 角部の破断を模擬したものは、膨張ひび割れに対する拘束力が低下 し、破断の無いものに比べて大きなひび割れが生じた。

3.2 荷重 – 荷重端および自由端変位 D19 供試体の荷重 – 荷重端お

Kouhei NARIKIYO, Takashi YAMAMOTO, Atushi HATTORI and Toyoaki MIYAGAWA



図1 供試体形状·寸法(単位:mm)



図3 載荷状況

表1 膨張ひび割れ幅

供試体	ひび割れ幅(mm)
D19、隅角部破断無し	0.55
D19、隅角部破断模擬	6.25
D10、付着区間300mm	7.30
D10、付着区間400mm	5.20

図2 膨張模擬

よび自由端変位を図4に示す。いずれの供試体においても鉄筋は 降伏せず、コーナースプリット型¹⁾の付着割裂ひび割れが発生し て最大荷重となり、自由端変位が急増する挙動であったが、膨張 ひび割れを模擬した供試体では、ひび割れの影響で最大荷重が大 幅に低下した。

D10 供試体の荷重-荷重端および自由端変位を図5 に示す。健 全供試体ではいずれの付着長でも鉄筋が降伏している。これに対 し、ひび割れ模擬供試体ではいずれも引抜け型の破壊となり、荷 重端変位と自由端変位が同様の挙動を示しているとともに、最大 荷重が低下した。表1に示すように、D19よりも D10の方が鉄 筋径に対してひび割れ幅が相対的に大きく、割裂破壊をともなう までのリングテンションが鉄筋周りに生じなかったと考えられる。 3.3 平均付着強度 付着割裂破壊を生じたD19 供試体の平均付着 割裂強度とひび割れ幅の関係を、既往の付着割裂強度算定式¹⁾か ら求めた値とともに図6に示す。平均付着割裂強度は、最大荷重 を付着区間の鉄筋表面積で除した区間平均の付着強度とした。付 着割裂強度の算定値は、コンクリート圧縮強度に膨張量 0.0 およ び 0.5%相当のASRコンクリートの圧縮、引張強度²⁾を代入して求 めた。また、断面の鉄筋位置を通過して供試体上面(幅 200mm)に 鉄筋に沿った 1mm幅のひび割れが唯一1本現れて 0.5%の膨張量 になると仮定し、算定値をひび割れ幅で表現した。なお、引張強 度は次式で圧縮強度に変換して用いた。

 $f_t = 0.23 \cdot f_c^{2/3} \tag{1}$

実験値では、断面の鉄筋位置を通過し、供試体表面にひび割れ が現れると付着割裂強度は大きく低下している。また、少ない実 験結果であるが、およそ指数関数的に低下している様子がうかが える。一方、算定値では、ASR膨張にともなう引張強度の低下は 圧縮強度よりも大きい²⁾ことから、引張強度を用いて算定した付 着割裂強度の方が低下が大きく、実験結果の低下傾向をよく捉え ることができている。





4. 結論

(1) 横補強筋隅角部の破断を模擬したものは、膨張ひび割れに対する拘束力が低下し、破断の無いものに比べて模擬膨張ひび割れが大きくなった。

(2) 断面の鉄筋位置を通過し、供試体表面にひび割れが現れると付着割裂強度は大きく低下する。さらに、 鉄筋径に対してひび割れ幅が相対的に大きくなると引抜け破壊に至ることもある。

(3) 既往の付着割裂強度算定式に膨張にともなって低下するコンクリートの強度特性を代入して付着割裂強 度を算定した結果、圧縮強度よりも引張強度を用いた方が実験結果の低下傾向をよく捉えることができた。 参考文献

 (1)藤井栄、森田司郎:異形鉄筋の付着割裂強度に関する研究、日本建築学会論文報告集、第 324 号、pp.45-53、1983.2

2) 土木学会:アルカリ骨材反応対策小委員会報告書一鉄筋破断と新たなる対応一、コンクリートライブラ リー24、第 I 編、pp.II-84~II-87、2005.8